

非流暢性から言語とコミュニケーションを考える

企画責任者：伝 康晴（千葉大学）

話題提供者：伝 康晴（千葉大学）

林 誠（名古屋大学）

丸山岳彦（専修大学）

船橋瑞貴（群馬大学）

指定討論者：定延利之（京都大学）

1. はじめに

非流暢性は、当初は言語使用における能力不足や病理の現れと見なされてきた。1950年代ごろから、健常な成人の自発音声の非流暢性に着目した研究が始まり、その後、言語学・心理学・会話分析・日本語教育・情報工学など、さまざまな分野で非流暢性の研究が盛んになった。母語話者の言語使用が録音・録画に基づいて分析される中で、ある種の非流暢性は言語能力・コミュニケーション能力の不可欠な一部をなし、ことばを用いて社会的活動を行う上で重要な役割を果たしていることが明らかになってきた。本シンポジウムでは、本学会を構成する諸分野における非流暢性をめぐる最新の知見を突き合わせ、非流暢性から言語能力やコミュニケーション能力とは何かを考えたい。

2. 非流暢性へのアプローチ

本シンポジウムでは、認知科学、会話分析、日本語記述文法、日本語教育の4つの立場から、非流暢性へのアプローチについて紹介する。

- **認知科学からのアプローチ**：人間の言語産出のメカニズムを探求する中で、非流暢性が処理の単位やタイミングなどの心的過程をのぞき見る「窓」となることが注目された。一方で、心的過程と非流暢性との連関は、コミュニケーションにおいて話し手から聞き手に送る合図として非流暢性を利用できるという考え方につながった。
- **会話分析からのアプローチ**：非流暢性が相互行為の中でいかに秩序立って産出され、相互行為上の資源としてどのように利用されるかが探求されてきた。とくに近年は、特定の位置で用いられる特定の形式の非流暢性が、どのような相互行為上の資源となっているかという観点から、さまざまな非流暢性の再検討がなされている。
- **日本語記述文法からのアプローチ**：近年になって大規模な自発音声のコーパスが利用可能になり、言語使用の実態調査から日本語の文法を記述する動きが加速した。そのような流れの中で、従来は切り捨てられてきた非流暢性のような現象を積極的に取り上げ、その形式と機能を体系的に整理しようという試みが始まっている。
- **日本語教育からのアプローチ**：非流暢性が実時間的な言語産出に不可避である以上、非母語話者の言語教育において、非流暢性をどのように教えるかという課題が生じる。近年、日本語教育の実践の場において、この課題に積極的に取り組み、日本語学習者が非流暢性を自ら産出するスキルを指導する新たな試みが始まっている。

3. 本シンポジウムの目的

以上のように、非流暢性にはさまざまなアプローチがあり、それぞれが非流暢性と言語能力やコミュニケーション能力との関連を念頭においている。本シンポジウムでは、まず、以上の4つのアプローチについて、伝（認知科学）・林（会話分析）・丸山（日本語記述文法）・船橋（日本語教育）の各登壇者がそれぞれの分野における最新の知見を紹介する。その後、言語学的アプローチで非流暢性を研究している指定討論者の定延氏（JASS42の招待講演参照）からコメントをいただく。最後に、非流暢性と言語能力・コミュニケーション能力の関係について、より包括的な視野から、フロアを交えて議論したい。本シンポジウムを通して、言語とコミュニケーションの科学としての社会言語科学に新たな視点を提供できれば幸いである。

認知科学から見た非流暢性

伝 康晴 (千葉大学)

1. はじめに

フィラーや語句の繰り返し、音韻の延伸などの非流暢性が発話産出時の認知処理と深く関わっていることは古くから指摘されている(Maclay & Osgood 1959)。たとえば、フィラーは、句や節の内部よりもその境界でより多く出現し、また後続する句や節が長いほど高確率で出現する。これらの箇所は一般に、発話計画の認知負荷が高くなる箇所である。話し手は発話産出に際し、その認知処理がどれほど高い負荷を伴うかをなんらかの仕方で「知って」おり、ときに応じて、そのことをフィラーという形で表出する。コミュニケーション場面では、これは、聞き手に対する「滞りの予示」として機能しうる。語句の繰り返しや音韻の延伸などの他の流暢性も類似の機能を持つ。本発表では、フィラーを含むさまざまな語における語末音韻の延伸に注目し、認知処理との関わりやコミュニケーション上の機能について考察する。

2. 音韻の延伸

モーラ等時性を持つとされる日本語において、自発音声における音韻は、さまざまな要因で通常より長くなることがある。たとえば、休止の効果や境界音調の存在などである。しかし、このような音韻・統語的な要因に加え、ある種の位置におけるある種の語の末尾音韻の延伸では、認知的な要因（上述の後続節の長さ）が関与している。Den (2015)は、『日本語話し言葉コーパス』の独話データを対象に、a) 節頭のフィラー・談話標識、b) 節頭の「は」でマークされた主題句、c) 助詞で終わる先行節末の3つの箇所で、それらの末尾音韻（(1)の下線部）の長さの後続節（(1)の二重下線部）の長さとの関係を検討し、後続節の長さが当該音韻の長さに影響する可能性があることを示した。

(1) … 発見するんですけども;_c (1.1) え;_a (0.3) 最悪なのは;_b (1.0) 自衛隊に: (0.2) この災難 (0.2) 訓練の …

3. 「滞りの予示」の媒体

音韻の延伸が「滞りの予示」として機能するとして、何がその媒体となるのかという問題がある。上で見たように、音韻の延伸はさまざまな位置でさまざまな種類の語において生じる。中でも興味深いのは、主題句末の延伸である。というのも、日本語の主題句は、文脈上明らかであれば、しばしば省略（ゼロ形式）されるからである。しかし、主題句を延伸するためには、そもそも主題句を言わないといけない。Den & Nakagawa (2013)は、『日本語話し言葉コーパス』の対話データを対象に、隣接ペアの第一成分中で言及された要素が第二成分中で明示的な主題句あるいはゼロ形式で再言及されている事例を抽出し、第二成分の節の長さ（(2)の下線部）と主題句の明示/ゼロ形式の関係を検討し、このような省略可能な主題句が明示されたとき（(2)の下線部）ほど第二成分の節（(2)の二重下線部）の長さが長いことを示した。

(2) L: 女性はいいんですか?

(0.2)

R: 女性はね いましたけども (0.4) また:寮が違って:

4. 発表の骨子

本発表では、以上の研究を概観するとともに、『日本語日常会話コーパス』を用いた、より日常的な場面での音韻の延伸の機能や、場面や話者の属性（年齢など）の違いによる影響などを検討する。

参考文献

- Maclay, H., & Osgood, C. E. (1959). Hesitation phenomena in spontaneous English speech. *Word*, **15**, 19-44.
- Den, Y. (2015). Some phonological, syntactic, and cognitive factors behind phrase-final lengthening in spontaneous Japanese: A corpus-based study. *Laboratory Phonology*, **6** (3-4), 337-379.
- Den, Y., & Nakagawa, N. (2013). Anti-zero-pronominalization: When Japanese speakers overtly express omissible topic phrases. *Proc. 6th workshop on Disfluency in Spontaneous Speech*, 25-28. Stockholm, Sweden.

「非流暢性」への会話分析的アプローチ

林 誠 (名古屋大学)

1. はじめに

会話分析の基本的な考え方に、「あらゆるところに秩序がある (There is order at all points)」(Sacks, 1992) というものがある。一見ランダムに見えるふるまいの中にも、極めて精緻な秩序が存在することをこれまでの会話分析研究は示してきた。「非流暢性」という語で表される諸現象にかんしても、会話分析では、それらの現象が相互行為の中でいかに秩序立った形で産出されるのか、そしてそれらのふるまいが参加者によってどのような相互行為上の資源として利用されているのか、を解明することを目指してきた。本発表では、「非流暢性」にかんするこれまでの会話分析研究を概観し、その基本的な分析的視点を明らかにするとともに、今後の研究の方向性についても展望する。

2. 相互行為の資源としての「非流暢性」

「非流暢性」にかかわる諸現象は、会話分析研究の草創期から注目されてきた。例えば、Jefferson (1974) は「言い間違いの訂正 (error correction)」に着目し、言い間違いを訂正する行為、あるいは、言い間違いを回避する行為が、話者のアイデンティティの構築の資源として利用されることを明らかにした。また、Goodwin (1980) は、話し手が発話を開始した時点で聞き手に視線を向けたときに、聞き手の視線が話し手に向けられていなかった場合に、話し手が発話を中断してやり直したりポーズを置くことで、聞き手の視線を獲得するプロセスを詳述した。

3. 「非流暢性」が現れる「位置」の重要性

相互行為に見られるふるまいを正しく理解するためには、そのふるまいが現れる相互行為上の「位置」に目を配ることが重要である。例えば、一般に「言い淀み」と記述される英語の uh (m) も、それが現れる位置によってその働きが異なる (Schegloff, 2010)。例えば、「依頼」や「提案」などの行為のあとの応答の位置に現れる uh (m) は、いわゆる非選好的 (dispreferred) な応答を予示するものと理解されるのに対し、電話の開始部で挨拶等が終了した直後に置かれる uh (m) は、電話の要件を切り出す発話の前置きと聞かれる。つまり、「非流暢性」という用語に包含されるさまざまなふるまいを分析するにあたっては、そのそれぞれの形式 (会話分析的に言えば「組み立て composition」) に加えて、それが生起する相互行為上の位置 (position) を考慮に入れなければならない。

上記の観点から、近年、日本語のいわゆるフィラー (「あの」「その」「ええと」「なんか」「こう」等) について、それらの相互行為上の生起位置に目を配りながら、参加者たちがそれらをどのように秩序立った形で用いているのか、そしてそれらがどのような相互行為上の資源として利用されているのかを記述する研究が進んでいる。その端緒を開く研究となった高木・森田 (2015) は、「質問のあと」の応答の位置の冒頭に置かれた「ええと」を分析し、それが「いま自分に宛てられた質問に答えるにはある種の難しさを伴うが、それでも応答の産出に最大限に努める」という主張を受け手 (質問者) に示すための資源として用いられることを明らかにした。また、Kushida & Hayashi (2019) は、何かを描写する発話順番の内部に埋め込まれた「こう」の働きに着目し、「こう」を用いることで話し手が「ある事態を描写すべく思い浮かべているにもかかわらず、言い表すのが困難なため、言い表す努力をしている」という主張を提示しているとし、それによって、事態の「言い表しにくさ (複雑さ、デリケートさ等)」に注意を向けながら、描写表現を理解するように聞き手を方向づけるための資源となっていると論じた。本発表では、こうした研究を発展させる形で現在進行している、会話分析の観点からのフィラー研究 (高木・森田・串田・黒嶋・林、準備中) の一端を紹介する。

参考文献 (一部)

- Kushida, S. & Hayashi, M. (2019). Doing visualizing in coping with speaking difficulty: On *koo*-prefacing in searching for a formulation in Japanese. A paper presented at the 16th International Pragmatics Conference held at the Hong Kong Polytechnic University, June 9-14.
- Schegloff, E. A. (2010). Some other “uh(m)” s. *Discourse Processes* 47: 130-174.
- 高木智世・森田笑. (2015). 「ええと」によって開始される応答. *社会言語科学*, 18(1), 93-110.

「自問発話」の形式と機能

丸山岳彦（専修大学・国立国語研究所）

1. はじめに

定延・田窪(1995)は、「言語表現は、話し手の心内に貯蔵されている情報データ自体に関わるものと、話し手の心的操作に関わるものに大きく二分できる (p.74)」として、「ええと」と「あの(一)」の違いを例に、「談話における話し手の心的操作のモニター機構」について論じた。以来、記述的な日本語文法研究の中でも、フィラーや自己修復、挿入など、非流暢性を積極的に取り上げて分析する動きが続いている。特に「話し言葉の文法」を考えるためには、発話中に不可避免的に現れる非流暢性の分類や、そこに現れる形式と機能の対応を明らかにしていく必要がある。そこで本発表では、「何」を含む「自問発話 (self-addressed question)」を例として、その形式と機能の対応について論じることとする。

2. 分析の対象と方法

本発表で取り上げる「何」を含む「自問発話」とは、次の例のように、発話中に「何」を含む疑問の形式（「何だっけ」「何だろう」「何て言うんですか」など）が挿入される場合である。

- (1) 清水じゃなくて 何だっけ (F あー) 名前思い出せない (F んーとねー)
- (2) モダンダンスっていうのは 何だろう クラシックバレエともちょっと違うし
- (3) そういう利用っていうのはもう (F あの一) 何て言うんだろう 研究材料としての利用で実際に

これらは、進行中の発話の構築が途中で行き詰まり、話し手が何らかの情報を検索していることや逡巡していることを表示するマーカーとして見なすことができる。『日本語話し言葉コーパス (CSJ)』の対話データ (58 対話、12.2 時間、153,591 語) の音声資料から、「何」を含む「自問発話」を目視で確認し、99 例を収集した。これらを形態的な観点から「何だっけ」類、「何だろう」類、「何て言うんだろう」類という 3 種に分け、それらの変異形を含めて集計した。

3. 結果

収集された 99 の事例について、(1) 「何」を含む「自問発話」の直前および直後に現れる要素（フィラー、ポーズ、統語的要素など）の分布、(2) 「何」を含む「自問発話」によって検索している対象（ものの名前を検索しているのか、説明の仕方を逡巡しているのか）、という 2 点から分析を行った。このうち(2)の集計結果を、以下に示す。

	出現数	ものの名前		説明の仕方	
「何だっけ」系	14	12	85.7%	2	14.3%
「何だろう」系	33	12	36.4%	21	63.6%
「何て言うんだろう」系	52	7	13.5%	45	86.5%
合計	99	31		68	

4. 「話し言葉の文法」の設計に向けて

言語の形式と意味・機能の対応関係を体系的に記述しようとする日本語記述文法の中では、従来、非流暢性が積極的に取り上げられることはなかった。言語運用の際に現れる「エラー」は文法研究の射程に入るものではなく、語用論で扱う問題だとする風潮すらあった。しかし、実際の話し言葉に現れる言語現象を分析・記述する枠組みを設計するためには、本発表でその一端を示したように、さまざまな非流暢性の形式と機能を体系的に整理することが必要になると考えられる。

参考文献

定延利之・田窪行則 (1995). 談話における心的操作モニター機構 —心的操作標識「ええと」と「あの(一)」—. 言語研究, 108, 74-93.

Tian, Ye, Takehiko Maruyama, Jonathan Ginzburg (2017). Self Addressed Questions and Filled Pauses: A Cross-linguistic Investigation, *Journal of Psycholinguistic Research*. 46 (4), 905-922.

日本語教育に非流暢性を取り入れる

ー挿入構造を例としてー

船橋瑞貴(群馬大学)

1. はじめに

フィラー、発話の延伸、語の中断(とぎれ)、言い直し、繰り返し、挿入、言いさしなどの非流暢性は、近年の各種研究によりコミュニケーション上の機能が明らかになってきており、ときとして聞き手の言語理解に寄与し、コミュニケーション・ストラテジーとして用いられることが指摘されている。本発表では、挿入構造の教育実践をもとに、日本語教育に非流暢性を取り入れることがどのような重要性を持つのかを考察したい。

2. 非流暢性と日本語教育

流暢であることが求められ、ある種の非流暢性をもつ発話は修正すべきものとみなされるのは、日本語に限らず言語教育の常であり、指導の要点の一つとされる。一方で、非流暢性が言語運用上の単なる乱れではなく、その存在意義が明らかになってきた現在、日本語教育において教える内容を吟味する際に非流暢性を無視することはできない。しかし、現行の日本語教育では、非流暢性の指導はほとんど行われていない(定延2004, 佐々木ほか2018)。非流暢性の中でもフィラーに関しては、多くの研究蓄積があり、情報処理操作や談話管理等の側面から音声コミュニケーション上の機能が明らかにされている。その知見は各種日本語教材にも反映されており、教育可能性が示されていると言えるが、非流暢性と括られる現象の全体からすると限られた指導状況にあると言えよう。自然で、流暢だと思われる日本語母語話者の発話にも非流暢性が散見されるという現実のコミュニケーションを踏まえ、「自然に話したい」という学習者ニーズに応えるべく、非流暢性を教える項目として指導に位置付けていくことが必要であると考えます。

3. 挿入構造と教育実践

挿入構造とは、「典型的には、ある発話の途中で別の発話が入り込んだ構造のことを指す。(中略)実時間内における発話産出の過程において、情報の提示順序が混乱したことに起因する現象であり、文法構造に関する非流暢性の一種」(丸山2014:89)である。具体的には、(1)のような現象である。

- (1) 私が 大学の 二年の 時に (F えーっと) 千九百九十六年の七月です (F えー) 学科の 仲間と 一緒に キャン
プに 行った ことについて 話します (丸山2014:89の表記を簡略化。挿入部は下線部)

船橋(2011)では、文節を分断する形で「別の発話が入り込んだ」挿入構造を対象とした分析にもとづき、「別の発話が入り込んだ構造」に伴う一定の言語使用が認められることが示されている(船橋2011より下表にまとめる)。

位置	挿入部への移行部	挿入部の末尾	挿入部からの復帰部
言語形式	・指示詞(コ系/ソ系) ・挿入部前接要素の繰り返し ・フィラー (上記形式と併用のフィラー/単独フィラー)	・文末の形式 (ですな/です) ・非文末の形式 (が/けれども類)	・指示詞(コ系/ソ系) ・非自立語 ・挿入部前接要素の繰り返し ・上記「非自立語」を除く形式と併用のフィラー

近年、生の日本語を取り入れた教材が増える中、挿入構造は、口頭発表や講義を理解する(「聞く」)スキルの習得を目的とした教材の一部においてみられるようになったが、自ら産出する(「話す」)スキルとしては指導の視野に入っていない。本発表では、上表の言語使用をもとに試みた口頭発表活動の教育実践を分析対象とする。日本語学習者によって産出された挿入構造を言語、非言語面から分析し、指導の要点について検討するとともに、挿入構造という非流暢性を指導に組み入れることが日本語の音声コミュニケーション教育においてどのような意味を持つのかについても考察する。

参考文献

- 佐々木藍子・砂川有里子・浅原正幸(2018). 日本語の非流ちょう性—とぎれと延伸の数量調査から— 言語資源活用ワークショップ2018 発表論文集, 468-474.
定延利之(2004). 音声コミュニケーション教育の必要性と障害 日本語教育, 123, 1-16.
船橋瑞貴(2011). 注釈挿入の発話構造と言語形式—言語による発話構造の有標化— 日本語文法, 11(1), 105-121.
丸山岳彦(2014). 『日本語話し言葉コーパス』に基づく挿入構造の機能的分析 日本語文法, 14(1), 88-104.